7. Brain Storming

■発想をカタチに変える

　ある日、小泉首相が、こんな政策を提唱したとします。「強すぎるドルに対抗するため、欧州のユーロにならい、アジアも統一通貨カネーをつくるべきだ！」
　皆さんは考えるはずです。この政策をとることで、いったい何が起こるのか。

「通貨を切り替えるときには、かなり混乱しそうだな」
「どこでも両替なしに同じ通貨が使えるのは便利かも」
「じゃぁ、海外旅行にも行きやすくなるのかな」
「でも、他の国と共通の通貨を使うっていうことは、そのうちの１つの国の経済が崩壊しただけで、共通通貨全体の価値が下がって、日本もとばっちりを食らう可能性があるってことよね」
「政情不安のミャンマー・インドネシア・フィリピンあたりは危ないかも・・・」
「いや、逆に成長株の中国やシンガポールに引っ張ってもらえたりはしないかな」

　これらは、非常に荒削りな直感です。けれど、このようにぼんやりとした発想ひとつひとつを大切に練り上げていくことで、ディベートの議論は完成していきます。ここでは、ブレインストーミングを通じてアイディアをまとめ、原稿をゼロから作りあげていく手順について、具体的に解説していきます。

■基礎知識を仕入れる

　ブレストを始めるまえに、まず与えられた論題についての基礎知識を仕入れておきましょう。あらかじめ現状についての正しい知識や、専門家の代表的な意見を知っておくと、あとの作業も非常に楽になります。
　１冊で論題全体をカバーしているような解説本[注1]を、適当に図書館から何冊か借りて読んでおくと効果的です（夏合宿の場合は、与えられた証拠資料に、ひととおり目をとおして下さい）。

■リンクマップを作ろう

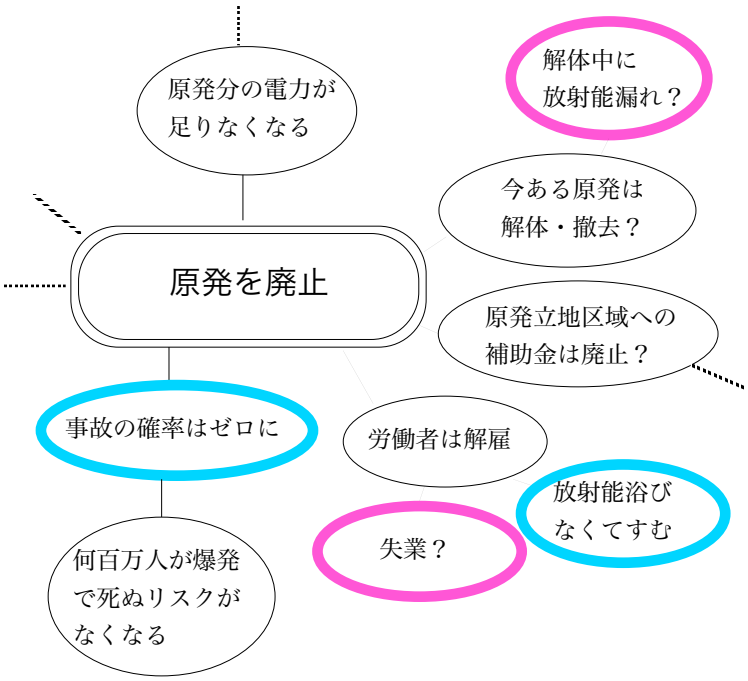
　それでは、いよいよブレストに移りましょう。
　黒・赤・青のボールペン、ピンクと水色の蛍光ペン、それにA3の白紙を１枚用意してください。最初に、黒のボールペンで論題となっている政策を真ん中に書き込み、２重丸で囲みます。

　次に、政策を実行して起こりそうなことを、とにかく思いつくままにどんどん書き足していきます。あまり詰めて書くとスペースが足りなくなるので、最初は余白を大きめにとっておくのがコツです。

[注1] 文藝春秋社が毎年発行している「日本の論点」は、様々な時事問題について簡潔に解説が加えられており、内容も比較的まともなのでおすすめです。ゼロからリサーチを始めるときには、ここを手がかりにするといいかもしれません。

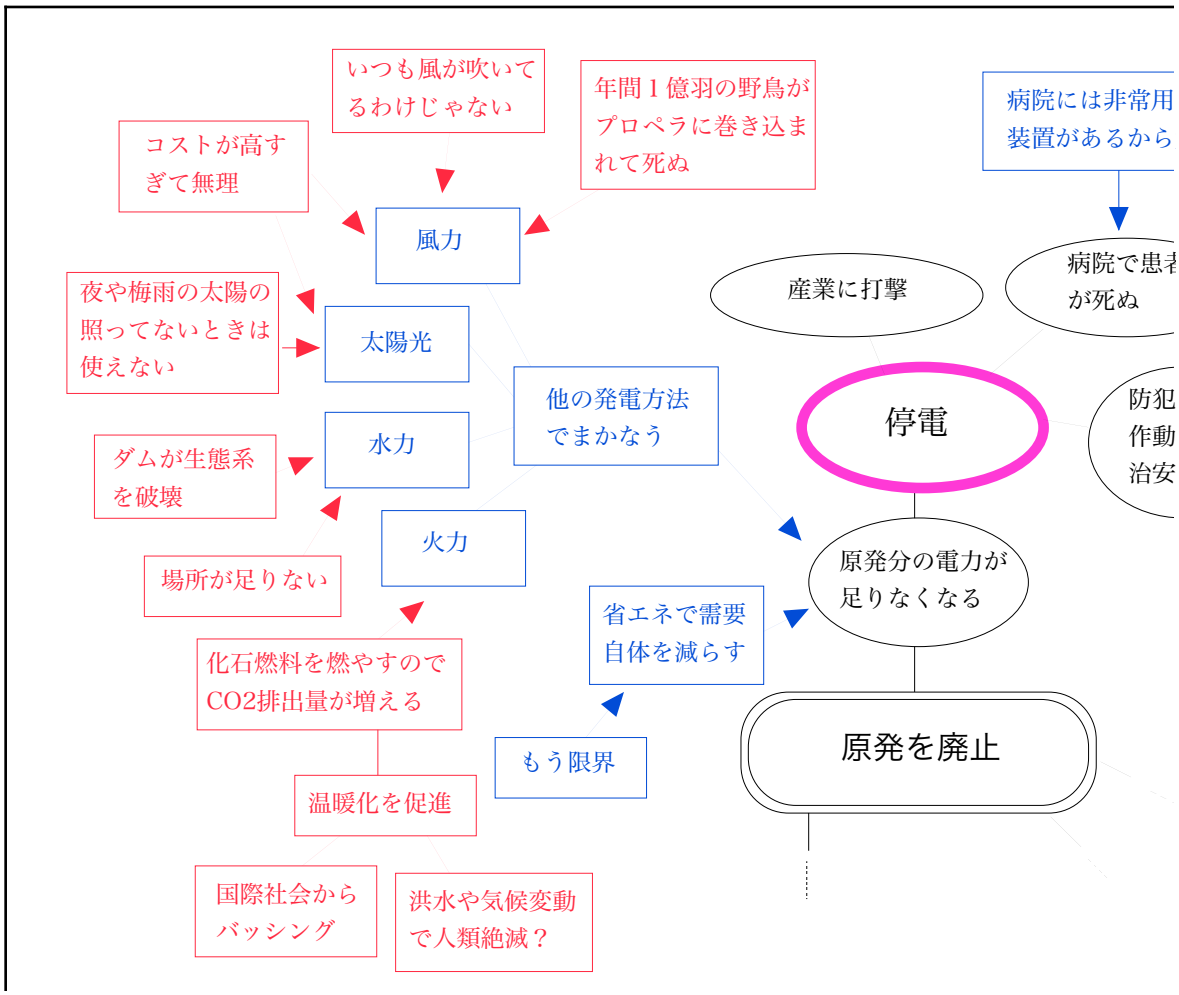
ある程度たまってきたら、全体を見返して、AD・DAになりそうなものを探しましょう。AD候補は水色の蛍光ペンで、DA候補はピンク色の蛍光ペンで囲んでおくと、見やすくなります。

ここから、さらに「これって本当に起こるのかな？」と考え、適当に反論・疑問点を書き足していきます。反論はポールペンの色を変えて、肯定側を青、否定側を赤で書くと見やすくなります。



順調に作業が進めば、最終的には下の図のようなものができあがってくるはずです。こうやってアイディアをフローチャートにしてまとめたものを、**リンクマップ（Link Map）**といいます。

原稿は、基本的にこのリンクマップをもとにして作ります。他の作業をしている最中に新しいアイディアが浮かんだら、あとでここに書き足しておきましょう。



■ADとDAを整理する

ある程度リンクマップが形になり、アイディアもネタ切れになってきたら、今度はADとDAの整理に移りましょう。

まず、リンクマップで浮かんだAD・DAの候補を、すべてリストにして書き出します。このとき、どういったプランを採ったときに成立する議論なのかどうか[注2]を、横に小さく括弧（）書きしておいて下さい。

AD	DA
・爆発のリスクがなくなる	・停電（火力以外）
・労働者の被爆がなくなる	・原発労働者の失業
・原発立地区域の野菜が売れるようになる	・野鳥の大量死（風力）
：	・CO2排出量が増える（火力）
：	：

次に、これら一つ一つを、AD・DAの３要素に分解して、検証してみます。

右の図のように、議論のおおまかな流れを書き出してみましょう。まだ、アイディアを整理する段階なので、そこまで綿密な証明を考える必要はありません。議論のだいたいの方針が見えてくれば、それで十分です。

リンクマップで整理しておいた発想が、ここで役立つことも多いはずです。また、あらためて議論をAD・DAとしてとらえ直すことで、新たにアイディアが浮かんで来ることもあるかもしれません。

すでに証拠資料がみつかっていれば、その内容も書き込んでおくといいでしょう。

また、途中で「やっぱこれは無理かも」と思ったら、それまでの議論を消したり捨てたりせずに、なぜ「無理」と思ったのかをメモして残しておきましょう。

こうすることで、あとから相手が同じような議論を出してきたときに、反論として再利用することができます。

AD１：　爆発のリスクがなくなる

a) Inherency：

今、原発には事故のリスクがある。

↓

1. 人為ミスによる事故
2. 設備の老朽化・不備による事故
3. 地震による事故
4. テロの標的にされ、飛行機が突っ込むかも

実例：チェルノブイリ、スリーマイル島

b) Significance：

・最大で数百万人が死ぬ？
・遺伝子の損傷は世代を越えて伝わる。
・突然変異による生態系への悪影響

c) Solvency：

・原発そのものがなくなるから、リスクはゼロ。
・実際、原発なしでやっていけてる国もたくさんある？

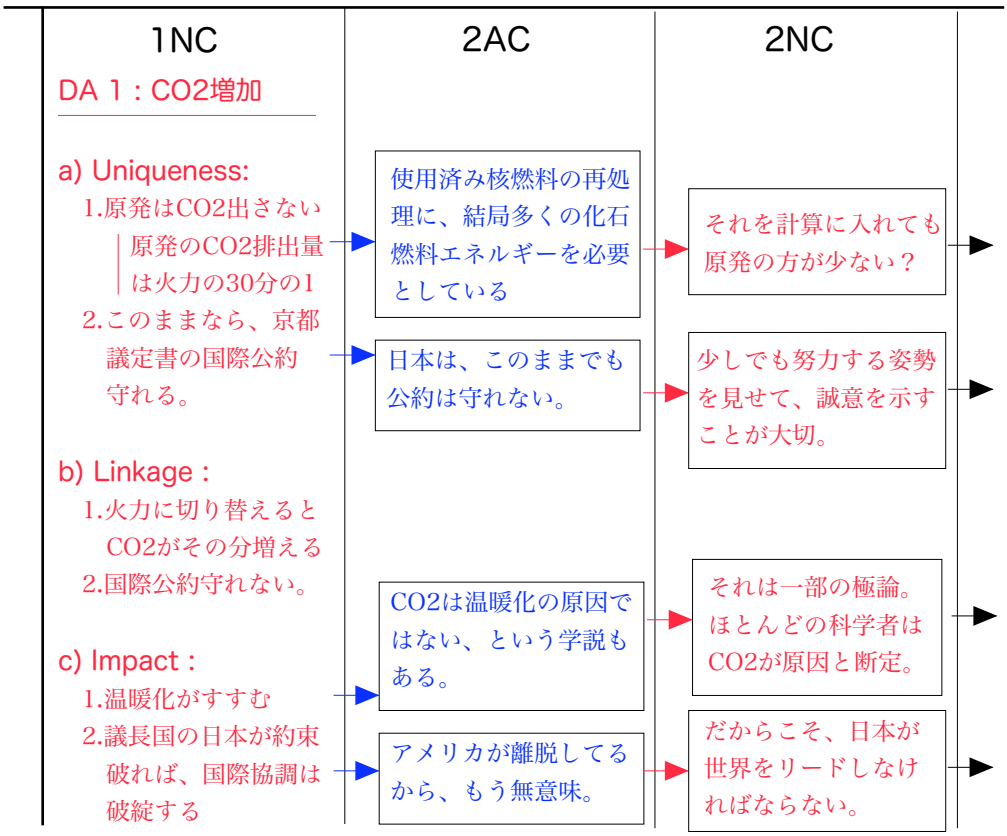
注2 たとえば「原発を廃止するべき」という論題なら、不足分のエネルギーをどこから得るかによって、DAは大きく変わってきます。このため、プランが火力の場合、太陽光の場合というように、場合分けして考える必要があるのです。

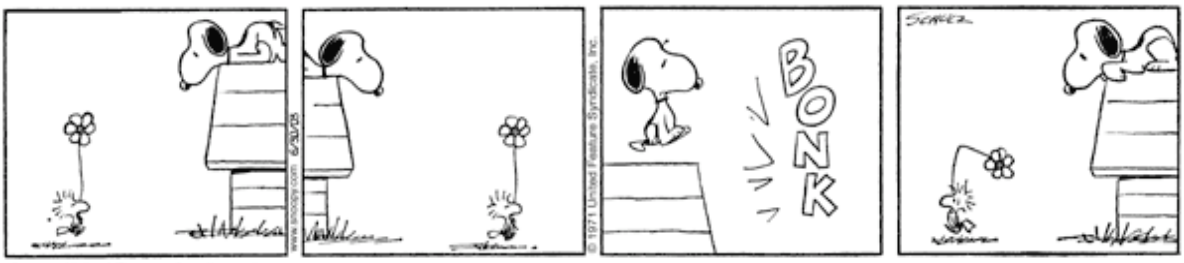
■フローシートにおこす

AD・DAがある程度形になったら、こんどはフローシートにおこします。

最初に、ADを1ACの欄に、DAを1NCの欄にそれぞれ記入します。このとき、１つのAD・DAごとに、それぞれ別のフローシートを使った方が、ごちゃごちゃしなくて楽です。また、あとで証拠資料や反論を書き込むときのために、縦の間隔をかなり広めにとっておきましょう。

書き終わったら、今度はリンクマップを参考にしながら、その議論に対する反論を書き込んでいきます。ここでも、厳密な証明は必要ありません。何となく頭に浮かんで「使えそうかな」と思ったアイディアを、片っ端からぶつけていきます。肯定側の議論は青で、否定側の議論は赤のボールペンで書き込みます。





© 2003 United Feature Syndicate, Inc.

■戦略を練る

フローシートが形になり、試合全体の骨組みが見えてきたところで、いよいよどの議論で勝ちにいくか、という**戦略（Strategy）**を考えていくことになります。

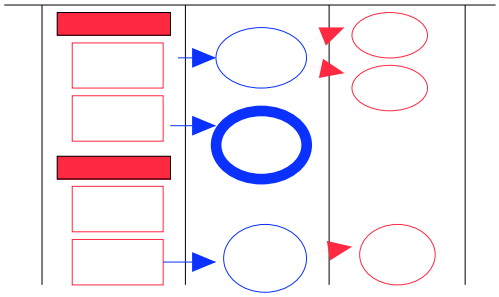
まず、否定側から始めましょう。肯定側は論題の範囲内でプランを自由に決める権利を持っているため、予想できるプランごとに、場合分けして考えなければなりません。表にして、まず各プランに対応するDAを選び出します。

代替発電	AD	DA
火力		CO2増加、爆発事故 有毒ガス？
水力		停電・ダムによる環境破壊
太陽光		停電・感電死・コスト
風力		…
…		…
共通	事故のリスク回避 ・・・	労働者の失業 解体時の事故？

ここで、各DAのフローシートをもう一度見てください。DAのとなりには、肯定側からの反論がたくさん書かれているはずです。もしその中に、どうしても再反論が浮かばない議論があったとすれば、そのDAは「弱い」ということになります。逆に言えば、自分たちが肯定側で同じDAを出された場合、その反論を出してやれば、かなりの確率で相手の議論を切ることができるわけです。

こうした、AD・DAの成否を決定づけるような**致命的（Crucial）な議論**を見つけたら、目印のために蛍光ペンで囲んでおきます。

なるべく確実に勝てるような戦略を立てるためにも、DAを決めるときには、この致命的な反論がなるべく少ないものを選ぶようにしましょう。



逆に、肯定側のADを攻めるときには、こういった致命的な反論を何とかして見つけだし、それを中心に議論を組み立てることになります。

一般に、試合の勝敗の決め手となった議論のことを**Voter**といいます。フローシートを見ながら、試合全体を通じてどこがVoterになりそうかを見極め、その議論を重点的に対策するようにしましょう。

■プランを決める

各プランに対応する否定側の戦略が決まったら、今度は肯定側です。
肯定側は、論題の範囲内でプランを自由に決めることができます。このため、戦略としては、様々なプランを比較・検討して、そこから生まれるDAがもっとも小さくなり、かつADがもっとも大きくなるようなプランを選べばよい、ということになります。言い換えれば、なるべく「致命的な反論」をたくさん持つDAしか出せないようなプランを選べば、それだけで肯定側はかなり有利に試合を始められるわけです。

また、肯定側はあらかじめDAを予想して、それに対する対策をプランとして組み込んでおくこともできます。たとえば、DA「原発労働者の失業」に対して、「新たに作る火力発電所で彼らを雇います」というように。こうした、DAを防ぐためのプランのことを、**スパイクプラン（Spike Plan）**といいます。

プランが決まったら、ADを決めましょう。ここでも、なるべく「致命的な反論」が少ないものを選んで下さい。

■議論の肉付けをする

どの議論を中心に試合を進めるかが決まったところで、今度は議論の肉付けをします。
まず、AD・DAから始めましょう。自分たちの議論を裏付けるのに必要な証明は何なのか、ステップごとに考え、適切な証拠資料を探し出します。証拠資料がどうしても見つからない場合には、常識的な例をあげてもいいかもしれません。
資料を探し終えたところで、今度は全体の構成を考え、証明のステップを並べ替えたり、きちんと英訳して文章を整えたりします。
AD・DAが終わったら、同様の作業を反論に対しても行います。「致命的な反論」を中心に議論を組み立てていくといいでしょう。

AD 1：Risk of Explosion

a) Atomic power plants in Japan can't endure to severe earthquake.
1.Present APP can endure to the earthquake whose scale is under magnitude 6.5.
>> Evidence ① <<
2. However the earthquake whose scale is over magnitude 7.3. might occur near the APP.
>> Evidence ② <<
3.Moreover the facilities around reactor are weak to the earthquake.
>> Evidence ③ <<

b) Many people will die.

>>Evidence ①<<
Writer Hirose '99 / Takashi / 週間金曜日 99.8.27 / p.10 / 金曜日
Q) .... (UQ

>>Evidence ②<<
Professor Ishibashi '97 / Katsuhiko 神戸大/ 科学'97.10 / p.721 岩波書店
Q) ..... (UQ

>>Evidence ③<<
Professor Ishibashi '99 / Katsuhiko 神戸大/ 週間金曜日 1999.8.27 / p.17
Q) ..... (UQ

■ラベリングとナンバリング

聞き手がわかりやすい原稿を作るためには、いくつかのコツがあります。

まず、まとまった大きな議論には、なるべく短いタイトルを付けるようにしましょう。「AD 1：Risk of Explosion」「a) Inherency」というように。こうした短い見出しのことを**ラベル(Label)**といい、ラベルを付けることを**ラベリング(Labeling)**といいます。

また、議論に番号を振っておくと、混乱や見落としが少なくなります。これを**ナンバリング(Numbering)**といいます。特に、ADやDAといった大きな議論では、階層構造になったナンバリングを用いるのが普通です。上から順に、

AD 1 : → Contention 1 : → a) : → 1
AD 2　　Contention 2　　b)　　2.

という構造になります。" a) "は、" **a-subpoint** "　と読みます。 短いDAの場合には、Contentionは使いません。

■そして、繰り返す・・・

これで、原稿作成の一連の流れは終わりです。
ただ、いつもこの流れにそってスムーズに原稿が完成するとは限りません。他の作業の途中で突然新しいアイディアがひらめいたり、柱にするつもりだった議論が、肉付けの段階になってなかなか資料が見つからず「やっぱダメかも」となってしまうこともあるでしょう。そんな時には、めげずに前のステップへ戻って、それまでの議論を手直ししながらやり直してください。
何度も繰り返すことで、次第に強い議論・戦略が完成していくはずです。

© 2003 United Feature Syndicate, Inc.